

早春の房総半島―いすみ鉄道

大月 和彦

立春が過ぎた暖いある休日、娘一家と房総半島へドライブをした。最近、乗り鉄にはまっている中3の孫がいすみ鉄道の古い車両に乗りに行くというのに誘われる。

いすみ（夷隅）は房総丘陵の東南部、夷隅川中流域に広がる穀倉地帯。難読の地名は日本書紀の伊甚（いじみ）によるという。

圏央道を市原舞鶴ICで下り、大多喜街道を南下する。道路沿いにゴルフ場の看板が立ち並ぶ。さすがゴルフ場銀座の異名がある房総半島。山あいに散在する谷内（やと）に広がる田圃、杉木立や竹林に囲まれた陽だまりに建つ民家：里山の景色を楽しみながら大多喜へ。

いすみ鉄道は、半島内陸部の上総中野から外房の大原までを結ぶ三セクの鉄道。沿線人口の減少などで経営が苦しく、内房の五井から上総中野までの路線を持つ小湊鉄道と連携し、半島横断の夜行列車やワイン列車などの運行、JR払い下げ車両の導入、鉄道グッズの販売など増収に努力している。多彩なイベントに多くの鉄道マニアの関心を集めている。

看板だった2両編成急行（キハ28 2364）は、老朽化のため昨年に運行を終えた。代わりに二月の休日に運行するキハ52の急行に乗るという。大多喜駅で「いすみ鉄道一日フリー乗車券1500円」を求める。

キハ52は1964年製の気動車。天井に大きな首振り扇風機。上下に開閉する窓。窓の下部に灰皿を留めた跡と固定された栓抜きが残っている。国鉄時代は長野県の大糸線に配置され、松本、穂高、大町、白馬など安曇野を走っていた。車内に「欧風列車と野沢温泉」の半世紀前の観光ポスターがぶら下がっていた。

大原行き急行キハ52は乗客6人を乗せて大多喜を発車、女性車掌の沿線ガイドが始まる。「このあたりは千葉県有数のコメの産地です。ここで採れるコシヒカリをどうぞ」、「大原名物国吉のタコ弁当は、地元のいすみ鉄道応援団のみなさんが作っています」

キハ52は、山あいに広がる集落と田圃をゴトンゴトンと走り、癒しの鉄道旅となった。